

# 文芸

## 俳句

端居して光そめたる星仰ぐ 池田 逸子  
 雨風のしげき夕べや冬瓜汁 伊藤 敬子  
 嫁ぐ娘の遠きアルバム秋の燈や 今関満喜子  
 夕映えの色に移りし旗薄 魚地 照子  
 流木に異國の名あり秋の浜 江森 悦子  
 分校地石碑を覆う芒かな 大木 素風  
 風に乗り白き穂波の芒かな 大谷 武彦  
 畑や男やもめの米を研ぐ 川島 孝夫  
 配流跡礎石残して枯尾花 川島 通則  
 世の風の有情無常や盆灯籠 向後 寛  
 人住まぬ山家囲みて芒の穂 越川 義則  
 脱け殻と垣根に着せてとぐろ巻く 小松 藤男  
 闇を吸ふ白粉花の白さかな 佐瀬 輝夫

孫の目と四つ集めて梨むきぬ 宍倉 道子  
 花芒風を抱いたり離したり 鈴木とし子  
 み社の流れ水澄みこころ澄む 玉虫 栗扇

水澄むやホテルのメニューずんだ餅 戸村 静華  
 ふり返りふり返り見る秋の月 早川 勇  
 澄む水と手に揃い飲む谷の朝 山口 とし

## 短歌

若き日の大志空しく老いし今 孫子の支えに悔いを知る 伊藤 定男  
 ひと日終え琥珀の酒と含みつつ 明日の作業メモを取りつつ 越川 義則  
 物忘れ動違ひ多く失敗の吾 采けたるやしみじみ思ふ 越川 福子

陸上のウサインボルトの世界新 百・二百メートル余裕あふるる 鈴木まさ子  
 「着いたよ」と居眠る媪に声をかけ バスの運転士下車を促す 青木 秀子

九十年生き来し吾の誕生日 子等が揃ひて祝ひくれます 吉岡 信子  
 幼子が椅子に腰掛け待らてぬつ 秋刀魚の骨を取りてやる間 押尾 輝子  
 み社の夫婦の杉は寄り添ひて 青空めかけ伸びて行くなり 平山 芳子

今もなほ残暑のなかを競い咲く 晩夏に米きカンナの花は 佐瀬 初音  
 持て成しの一つと思ひ白檀の 香煙らせ友を待らぬつ 田崎 尚美  
 風邪に臥す吾が枕辺に救急車の 遠く聞こへて通り過ぎゆく 芹川 初子

老人ホームの夏の祭りの大漁節 寡黙な媪も踊り始めぬ 池田 春江  
 源泉流るる滝の岩肌に 自然の塗りし緑と黄色 八角 三枝  
 夕暮の深まるほどに数を増す 雑木林の白鷺の群 西山満里子

成田空港綱弄さるる 島田ますみ  
 精霊会終りて帰る野辺の道 西方浄土思ふ渡りつ日 齊藤つね子



## 古屋の薬師如来

古屋の県道十字路から粟山川にかかるふれあい橋へ向かう途中の右側に、小さなお堂がたたずんでいます。このお堂が薬王院福秀寺という、古いお寺です。薬王院とは薬師如来という仏様を本尊としている寺院号で、これと同じ院号を有したお寺が各地にあります。

福秀寺の薬師如来は丈一六三cmを測る立像で、一本の力ヤの木から彫りだされた一木造の仏像です。彫り上げた後の仕上げに、表面は漆を塗って金箔を貼り付けてありましたが、長い年月を経て、全体的に黒ずんでしまっています。頭の螺髪は細く彫りだされ、肉髻は低く表され、耳朶は長くたれています。衲衣は左肩にかけて胸は大きく開け、腹から足にかけて細かく襷がYの字に流れ、古い様式をしめしています。右手は肩まで上げて掌を前に示し、左手は失っています。背面は省略され、背中に浅い背割りがされ、元は光背が付いていたと思われるか。



▶ 古屋地区の薬師如来像